沖縄の高校中退者等に係る人材育成事業
支援手法 とりまとめ

受託事業者：株式会社アソシア
令和５年 ３月

沖縄県 子ども生活福祉部
子ども未来政策課

事業の概要

1. 事業の目的

高校中退者等の困難を抱えている者に対して、居場所や企業等と連携し、キャリア形成支援を実施し、社会で自立できる人材へ育てるとともに、その支援手法を取りまとめ、地域において関係者がこれらのノウハウを共有し繋がることで、将来的な貧困の連鎖を断つ事を目的とする。

2. 実施期間

令和2年4月～令和5年3月

3. 対象者の設定

学ぶ機会と繋がっていない、可能性を広げる機会を必要としている若者。
令和3年度より中卒進路未決定者及び高校中退者に限定した。

・居場所利用中
・概ね15~20歳
・高校中退者等
・中卒進路未決定者

4. プログラムの構築

対象者の現在の状態像を明確にし、最終的に「どのような状態を自立」と見なすかをより具体的にイメージした。その自立した状態像に向けて、どのような支援や関わりが必要なのかを検討し、プログラムを構築した。

対象者の現在の状態

Ⅰ. 所属感の欠如

集団生活（活動）から疎遠な状態で、再び集団活動へ参加する事に対して「不安」を抱えている状態。

Ⅱ. 役割の欠如

集団生活（活動）において役割（存在意義）が見出せず、どのような立ち振る舞いをしていいのか分からない状態。

Ⅲ. 自己効力感の欠如

達成体験や成功体験の乏しさが要因となり、何事に対しても無気力であったり意欲が低い状態。

→

対応する支援アプローチの検討

Ⅰ. 所属感の欠如 → マズローの欲求の5段階説

社会的欲求（集団への帰属意識）が満たすことができるよう、同世代やスタッフとの交流を通して所属感を獲得できる活動の提供。

Ⅱ. 役割の欠如 → ICF

参加者それぞれが他者から必要とされ役割を担って活動に参加できるよう、役割実施の学習やその機会の提供。

Ⅲ. 自己効力感の欠如 → アルバート・バンデューラーの自己効力感

達成体験や成功体験を経験できるよう、目標設定とその振り返りを繰り返す連続したスモールステップの提供。

→

実施したプログラムと構造

基本プログラム

・関係性の構築
・自己理解・他者理解
・チームビルディング
・職業観の育成
・キャリアビジョンの作成
・自己実現に向けたアクション

就学体験プログラム

・「働く」を知る
・「事業計画」を作る
・「学ぶ」を知る

就労体験プログラム

・対人技能
・基本的労働習慣
・職業適正

各プログラムで実施した参加への工夫

個別対応

対人緊張や不安を抱える対象者に対して、支援スタッフとの1対1による関係性づくりを実施した。

小集団への移行

2～4名の他利用者との関係性づくりを実施した。言語活動を抑えたレクレーションから開始し適応状態を見極め、言語活動を増やしていった。

集団形成

言語活動が活発になった小集団と他小集団との統合を繰り返し、集団形成を行った。

プログラム提供と支援の実施

Ⅰ.所属感の獲得に向けて

所属感を感じることができるよう個別→小集団→大集団へと段階的に移行するとともに、集団と個別の両輪で支援を実施した。

Ⅱ.役割の獲得に向けて

自己理解や他者理解を深め、自分の持てる役割や相手への頼り方を知ることで様々な活動に参加することができるよう支援を実施した。

Ⅲ.自己効力感の獲得に向けて

個人や集団活動の達成目標を自ら立て、その振り返りを行うなどスモールステップ達成とその連続による支援を実施した。

→

対象者の変化

Ⅰ.所属感の獲得

段階的な共同作業を通して、仲間や友人が出来た事で所属感を獲得していき、より上位の承認欲求や自己実現欲求が現れた。

Ⅱ.役割の獲得

自己理解を図ることで、自分の得意な事や苦手な事への理解が進んだことで役割を担うようになり、集団活動へ参加することができるようになった。

Ⅲ.自己効力感の獲得

様々な活動や共同作業を通して、達成感や成功体験を積むことが出来た。
また、同世代の成長も代理経験となり自己効力感が向上した。

基本プログラム

目的

集団活動や様々な体験を通して自己理解を深め、自己決定に基づき
自己実現を成し遂げるための主体性を育む。

構造

STAGE Ⅰ：関係性の構築
STAGE Ⅱ：自己理解・他者理解
STAGE Ⅲ：チームビルディング
STAGE Ⅳ：職業観の育成
STAGE Ⅴ：キャリアビジョンの作成
STAGE Ⅵ：自己実現に向けたアクション

STAGE Ⅰ：関係性の構築

科目	内容
交流会	これから一緒に過ごす仲間と楽しみながら仲良くなろう!
振り返り	交流会を振り返りながら自分にとってどのような体験だったか

STAGE Ⅱ：自己理解・他者理解

科目	内容
心理検査	自分の性格や得意なこと、苦手なことを知ろう!
スタッフ講話	大人にも得意なこと苦手なことがある!?人生ヒストリー!

STAGE Ⅲ：チームビルディング

科目	内容
フィールドワーク	チームで力をあわせて謎を解け!リアル謎解きゲーム!!
宿泊学習	旅行日程や係も自分たちで!得意なことを活かして参加しよう!

参加者のコメント
色んな人と関われて、色んな体験が出来て楽しかったし、いい経験になりました。自己理解のプログラムで自分の性格を知れたり、グループワークは大変だったけど、めちゃ楽しかったし、みんなと仲良くなれて良かったです。それから色んな話を聞けたり、スタッフと話したりすることで視野が広がりました。これからも体験したことを活かして頑張っていこうと思います。

STAGE Ⅳ：職業観の育成

科目	内容
職業人講話	体験先のお仕事について知ろう!
職場体験	お仕事を体験して、自分の得手不得手を振り返ろう!

STAGE Ⅴ：キャリアビジョンの作成

科目	内容
ストレングス	"自分の強み"ってなんだろう?強みの活かし方を考えてみよう!
セルフアセス	これまでの人生を振り返り、困難をどのように乗り越えたか・・

STAGE Ⅵ：自己実現に向けたアクション

科目	内容
自主企画	企画・プレゼン・実施まで!!最後の集団活動!!
カンファレンス	卒業後の進路に向けた計画を立て、関係者に必要な支援を依頼・・

参加者のコメント
私は今まで社会とのつながりを持てず自分の居場所がなくてとても不安な毎日を過ごしていました。このプログラムに参加して過去の自分を見つめ、自分の気づかなかった強みを知ったり、それを元に未来の自分について考え直すことができました。グループワークは大変でしたが、充実していました。僕はこのプログラムを通して、人に頼る、助けを求める力を得たと思います。

就学体験

目的

就学体験を通して、選択肢が広がることで学校や居場所における学習への取り組みの意欲が高まる。

構造

STAGE Ⅰ：「働く」を知る
STAGE Ⅱ：「事業計画」を知る
STAGE Ⅲ：「学ぶ」を知る

STAGE Ⅰ：「働く」を知る

科目	内容
働くとは	自身にとって働くことの喜びについて知る
収支とは	売上や経費などについて知る

STAGE Ⅱ：「事業計画」を知る

科目	内容
事業計画作成	起業内容・理念・予算を作成する
事業計画発表	事業計画の内容を発表する

STAGE Ⅲ：「学ぶ」を知る

科目	内容
進路調査 1	各種学校の課程を知り、卒業後の進路について知る
進路調査 2	現在の進路希望や選択肢について振り返る

参加者のコメント

プログラム内容が面白そうだったので参加しました。事業計画書作りや予算書作りでは、チームで力を合わせて、互いの求めているものや考えていることの意見交換を行うことで、自分一人では考え付けないアイディアを得ることができ、視野を広げることができました。報告会では自分達の足りない部分に気づき、考えを深めることができたし、精神面でも強くなることができました。

就労体験

目的

職場体験を通して、自身の能力が明らかになり、獲得課題が明確になることで進路選択ができる。

STAGE Ⅰ：対人技能
STAGE Ⅱ：基本的労働習慣
STAGE Ⅲ：職業適性

STAGE Ⅰ：対人技能

科目	内容
VRTカード	興味・関心、自信についてアセスメント
ビジネスマナー	就労における基本的な所作を学ぶ

STAGE Ⅱ：基本的労働習慣

科目	内容
実習先講話	実習先の業務内容ややりがいを知る
企業実習	対人技能や基本的労働習慣の評価をする

STAGE Ⅲ：職業適性

科目	内容
実習報告会	実習で得た学びを発表する
面接対策	面接に関する実践練習をする

参加者のコメント

企業実習に行くために参加しました。たくさんの企業に見学・体験に行きましたが、自分の好きなことを仕事にしている人達を見て素敵だと思いました。他のプログラムでは職業レディネステストと体験で自分の好みが分かったので良かったです。面接練習は心配ないと思っていたけれど出来ていない事や知らなかったこともあって、その課題に普段から気をつけたいと思いました。

ケース01：拠点型居場所から繋がり、進学を決めたAさん

1. 繋がった経緯と見学時の様子

中学校在籍時、部活動にも所属するなど問題なく学校生活を送っていたが、兄がひきこもった影響で徐々に不登校気味となった。中学生活の終盤は学校に通う意欲が無くなり完全に不登校となる。高校受験はしていない。その頃から地域の社会福祉協議会が運営する子ども食堂へ通い支援を受けていた。中学校卒業後は拠点型居場所へと繋がり、日中はその居場所で過ごしていた。休みの日には家業のお手伝いをして小遣いを得ると、子ども食堂へ差し入れをするなど優しい一面も見せていたとのことであった。

当事業の趣旨を知った拠点型居場所から紹介を受け、見学、体験へと至る。見学・体験時は同拠点型居場所に通っている他利用者と一緒に参加していたため比較的緊張度合いは低かったように見えたが、顔見知りでない利用者と一緒の体験になると若干不安な様子であった。しかし、すぐに適応し他利用者とトランプやカードゲームをするなどすぐに仲良くなっていった。

見学時の面談では、高校進学をしたいという思いもあるが、働いて収入面で家庭を支えることも考えており、迷っているとのことであった。家族としてはそのように考えてくれるのは嬉しいが高校に進学してほしいと考えており、中学校卒業後に学びを得る場所がないことに困り感を感じているとのことであった。

2. 参加当初の状態

集団活動へは問題なく参加することができており、休憩時間になると、なかなか集団へ入りきれていない他利用者へ話しかけ、カードゲームやボードゲームへ誘うなど他者も積極的に巻き込む様子や、送迎時も常に他者やスタッフと本日あった出来事について話をしていた。参加以前は、進路選択のために当事業に参加したとのことであったが、参加序盤においては進路について深く考えることよりも仲良くなった他利用者と楽しむことを有意義に感じているようであった。

3. 参加してからの変化

個別支援

当事業のプログラムに参加しながらも、休みの日には家業の手伝いをしており多忙なことから進路選択について考えることを先延ばしにしていた。家業手伝いのため、プログラムを休むこともあった。個別面談を実施しすぎると本人にとって負担となってしまうことも予想されたことから、本人と相性の良いスタッフが送迎を担当し、送迎中の車内などで負担のない範囲で今後の進路選択や優先順位について考える時間を設けた。結果として、プログラム自体を楽しみ、送迎車内で進路相談ができたことで進路決定へと繋がり、その後のフォローアップも円滑であった。

集団支援

明るく社交的で他者を積極的に巻き込む性格であったことから、周りからも慕われ次第にムードｈｈｔメーカー的な存在からリーダー的な存在へと変化していった。グループワークなどにおいても発表者やファシリテーションを仲間から依頼されることが多かったが、実は意見をまとめることや整理することが苦手（経験不足）で、困り感を感じていた。本人やその他利用者も含め、役割の分担や担い方（自分が苦手な事は人に頼る。他者が苦手で自分が得意な事は担う。）などをレクチャーした。その結果、自身の役割を確立したことで自らも楽しみながら集団活動へ参加することができていた。

4. 参加時の支援のポイント

参加当初から家族との面談により、家庭環境や家族意向、本人意向をアセスメントし、家族と本人という両視点で関わり世帯支援として実施したこと大きなポイントであったと考える。参加当時はコロナウイルス感染拡大の影響により家業に経済的ダメージがあるなかのプログラム参加となっており、家族は本人の高校進学を応援しながらも家業の手伝いを本人に依頼をしなければならない状況であった。本人へは、次回の参加がしやすいよう休んだ日のプログラム内容を報告するなどしていつでも参加できることを伝え、家族へは休ませたことをネガティブに捉えないよう家業を手伝いながらでも進路選択に向けた支援が実施できる旨を伝えながら参加継続を支援した。また、プログラムに参加していた他利用者達が本人へコンタクトをとり、本人が参加することを待ち望んでいたことも本人が所属感を感じ、家業の手伝いがない日は必ず参加していたことに大きく影響していたと考える。

5. 終了に向けての支援

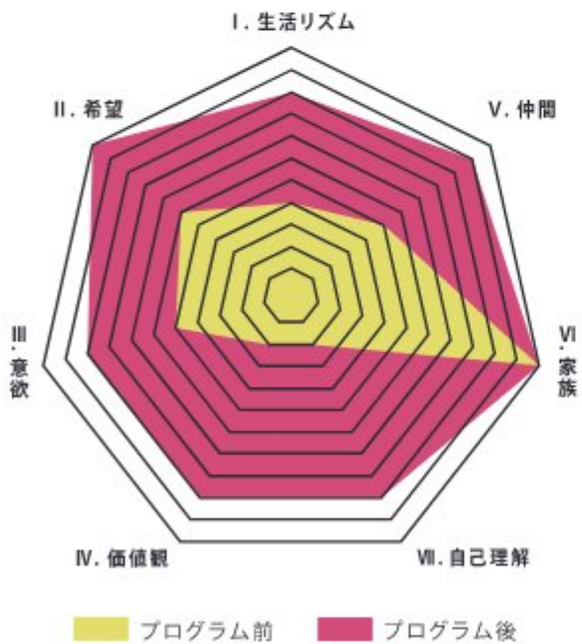
終了時の進路

参加当初から考えていた高校進学を決めるとともに、家業の手伝いもしくはアルバイトなどもしながら世帯の負担を軽減したいと希望。

終了に向けた支援

卒業前に、以前から関わっていた拠点型居場所や社会福祉協議会、保護者とカンファレンスの場を設け、本人意向の共有と今後の役割分担を実施。拠点型居場所や社会福祉協議会に学習支援や進路に向けた手続きを担ってもらい、当事業でモニタリングや個別相談を担当するなどして進捗の確認や共有をしながら進めていった。その後、無事全日制高校へ合格。入学後はアルバイトも決定した。その後、部活動や課外活動への参加をしていることや、県大会、全国大会への参加、最近の様子などを報告してくれている。

6. 利用者による自己評価



Ⅰ. 生活リズム

前 3：毎日夜遅くまでゲームをして気づいたら朝になっていた
後 8：生活リズムが整って朝起きれるようになり、夜も早く寝るようになった

Ⅱ. 将来への希望

前 5： 高校進学
後 10： 進学が決まり後は受験のみ

Ⅲ. チャレンジする意欲

前 4：あまり決めていなかったけど進路のこと
後 8：進路も決まり後は勉強のみ

Ⅳ. 視野や価値観の広がり

前 1：自己理解について（項目）と同じように価値観が何か話たがらなかった
後 8：自分の視野・価値観が広がった

Ⅴ. 仲間・人との繋がり

前 4：元々人と話すのは好きでしたが初対面の同世代の人と話すのは抵抗があった
後 9：最初抵抗があったけれどそれが今なく逆に同世代と話すのが好になった

Ⅵ. 家族との関係性

前 10：特に変化なし
後 10：自分の将来を応援してくれた

Ⅶ. 自己理解

前 1：自分のことが分からずにいて本当の自分を探していた
後 8：自己理解をやった後で自分の気持ちや性格が知れて良かった

ケース02：若年妊産婦の居場所から繋がり、就労したBさん

1. 繋がった経緯と見学時の様子

高校1年時に妊娠し未婚での出産を決意する。同年に家族の都合で他市町村へ転居し出産。産後すぐに居住市町村の若年妊産婦居場所（以下、居場所）を利用する。居場所で子育てを学び過ごすも、同世代とは積極的に関わろうとしなかった。本事業の説明は、子育て中で外出が安易に出来ないことを考慮し、こちらから居場所へ赴き実施した。事業説明が自立を考えるきっかけとなり、プログラム参加に向け居場所スタッフの協力を得ながら準備を開始、保育園入所の手続きや、急な子のお迎えに対応できるよう自動車運転免許を取得し体験へと進む。

入学面談時では、活動に参加できることは楽しみであると答えるも、高校中退して2年が経過するため、同世代とどのようにコミュニケーションをとったらいいのか不安であると話す。初回の小集団では、口数が少なく控えめであった。支援者からの質問には笑顔で答えるが、集団の中で積極的に参加するわけではなく、場の空気を読みながら相手を窺っている様子であった。

2. 参加当初の状態

子の体調不良がない限り、毎日参加することは出来ていたが、集団活動の場では、空気を読み過ぎて、自分の気持ちを控えることが多かった。毎日異なる場所に座るのではなく、自分の安心できる場所を確保し参加していた。参加当初は、声をかけられると、答えるという状態であったが、約1週間経過すると、女子グループの特定のメンバーとは昨日の出来事などを自分から共有するようになっていた。

3. 参加してからの変化

個別支援

プログラムが始まり他利用者との交流が活発になると、自身と他者を比較し、感情を抑制する様子がみられた。自己開示をすることが苦手で他者に弱みをみせることや悩みを相談することができず、我慢して居続けることしか打開策がなかった。感情を過度に抑制することがないよう休憩を促し、休憩を希望した際は、1人になりたいのかスタッフに聞いてほしいのか等、必要としているサポートを確認した。スタッフに聞いて欲しいと願い出た際は気持ちを吐き出すことや受け取ってもらう経験ができるように努めた。特に導入初期は、社会通念を逸脱していない内容であれば、本人が話している最中は傾聴に徹したため、プログラム中盤では自分からプライベートの共有や相談、将来の希望を話してくれるようになった。

集団支援

自己・他者理解の時期には、自分の得意なことと苦手なことを再確認しながら、個性の理解を深めた。自分の周囲に起きていることに注意を払い、合理的でスケジュールに沿って行動することを好むタイプであったため、記録係や共有係、タイムキーパー等の役割を依頼した。依頼当初は遠慮をしていたが、自分の強みが集団内で良い影響を与えていることをスタッフとの振り返りで確認しながら役割をこなしていった。他メンバーも、何かを取り決める時は、必ず本人に客観的な意見を求めることが多くなり、様々な共同作業を通して所属感や役割の獲得ができたと思われる。

4. 参加時の支援のポイント

子の体調不良で保育園からの呼び出しに不安を感じていたため、利用開始前から早退や途中送迎が可能であること、また子の夜泣きを対応し寝不足による体調不良時には、個室で仮眠をとり心身を休めて参加するよう促すことで、安心して活動に取り組める環境を整えた。

関係性の構築時には、安心安全な環境づくりを優先するため自主的な発表を強制することはなく、導入期初期は、「はい（そう）」か「いいえ（違う）」で答えられるようなクローズクエスチョンから開始し、答えることに抵抗が無い様子が見られるといくつかの選択肢を用意して、その中から選択できるよう質問難度を少しずつ上げていった。段階的な支援を行うことで、短期間で集団活動に対する緊張が和らぎ、自主的に集団へ参加出来るようになった。

スタッフとの関係性が構築されると、スタッフに向けて共有や相談は出来るようになるが、同世代との交流においてはコミュニケーション方法が分からないため、抵抗感があったように見えた。同世代から仲間として認められる体験を獲得するため、自己理解の時期は小集団でのグループワーク時間を増やした。自分の気持ちや考えを他者へ伝え、また同意や共感される体験を繰り返し、所属感の獲得を目指した。

5. 終了に向けての支援

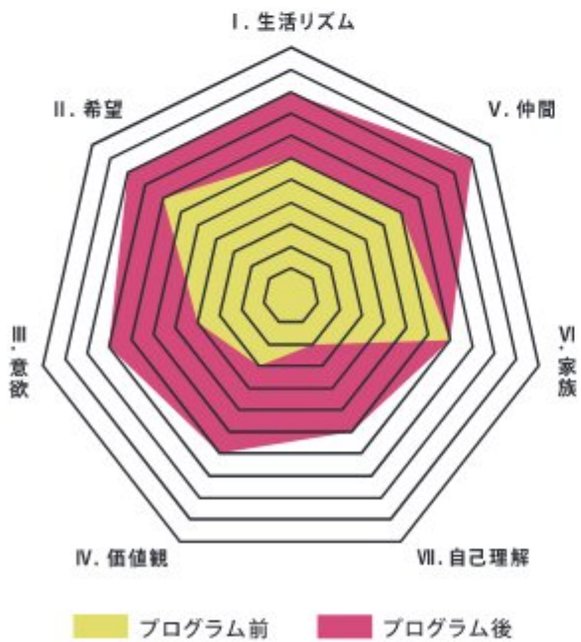
終了時の進路

将来的に、子と2人暮らしをしたいとのことから就職を希望。また子の年齢を考慮し、フルタイムではなく短時間勤務が選択できるアルバイトから始めたいとのことであった。

終了に向けた支援

卒業１ヶ月前と、卒業直後に居場所スタッフとカンファレンスを設け進捗確認や共有を行なった。居場所と本事業の役割を決め、居場所では生活面の再アセスメントと20歳までの長期プランの作成、本事業では就労にむけたアフターフォローをすることとなった。プログラム終了後も支援が途切れることがないよう、本人との個別面談だけではなく、関係機関と定期的な情報共有や役割確認を行なった。その後、アルバイト就労を始め、子育てに励んでいる。時折、顔をみせにきてくれた際は、現在の様子を話してくれる。今後のキャリアアップに向けて何やら活動を開始するそうだ。

6. 利用者による自己評価



Ⅰ. 生活リズム

前 5：朝がつらかったかも
後 8：リズムがついて決まった時間に起きられる

Ⅱ. 将来への希望

前 6： あったけど少し諦めていた
後 8： がんばろうと思えるようになった

Ⅲ. チャレンジする意欲

前 3：自分のやりたいことがわからなかったから意欲がなかった
後 7：なんとなくチャレンジがしたくなった

Ⅳ. 視野や価値観の広がり

前 2：こうなったらもうこうなるんだって一人で決めていた部分があった
後 6：色んな人のいい所をもらったりすることを覚えた

Ⅴ. 仲間・人との繋がり

前 5：地元の友達だけで他はいらないと思っていた
後 9：改めて仲間の大切さを知れた

Ⅵ. 家族との関係性

前 6：無記入
後 6：そこまで変わらない

Ⅶ. 自己理解

前 1： 自分がどうゆう人なのか、何を大切にしているのか全くわからなかった
後 8：少しずつだけど知れてきたし、自分を理解しようと思えた

ケース03：行政から繋がり、進学を決めたCさん

1. 繋がった経緯と見学時の様子

小学校の時にいじめにあったことから不登校となる。中学校在籍時も不登校であったため、教育委員会が設置した居場所に通っていた。居場所では保育体験や畑活動、料理、製菓作りなどの活動に積極的に参加していた。県立高校を受験したが失敗、居場所の年齢制限が15歳まであったことから、居場所卒業後は自宅のみで過ごす日々であった。

世帯が生活保護受給世帯であったため、当事業の情報を知った生活保護担当課の支援員から本人に情報提供したいとの連絡があった。しかし、同時に本人が本事業に興味を示し通いたいと希望しても、母親が拒否する可能性があるとのことであった。

見学、体験時は支援員が同行した。本人はイヤホンをして、目線を合わさない。本人のこれまでの様子は同行支援員が代わりに話す。本事業支援員からの質問には、「うん」「ううん」とうなずいて答え、最初に発した言葉は「そうかもね」とからかうような回答であった。2回目の体験も支援員が同行。一緒にカードゲームを実施しており、冒頭は渋々という態度で参加していたが、何度か繰り返した結果、無邪気に楽しむ様子へと変化した。本人が当事業への参加を希望したため入学面談へと至り、入学面談時に母親が初同行した。その面談では、事業内容や入学に関することではなく、母親本人が興味のあることを話したがり、入学に向けた面談実施が困難であった。結果として入学面談は数時間かかり参加承諾を得ることができた。

2. 参加当初の状態

複数回の体験中は無邪気に支援員と交流ができるようになったが、小集団時は再度イヤホンをつけ、他者との交流に拒否感があった。見学時同様、時間がかかったが徐々に緊張が解れると無邪気に楽しみ、以降「次はいつあるのか」と体験を楽しみにしていた。その後、他利用者と仲良くなりイヤホンを外し、交流を楽しむようになったが、座学などのプログラムはすぐに集中が切れてしまい、他利用者へ話しかけたりすることが多くみられた。それを嫌がった他利用者の反応を見て、帰りの送迎時に泣き出すこともあった。

3. 参加してからの変化

個別支援

座学等で集中が切れる理由は内容を理解できないとのことであったため、座学などのプログラム時は支援員がそばにつき、講師が話している言葉の意味を本人がわかるよう解釈するなどして対応した。その後、集中力は維持できている。

職場実習において、飲食店の実習時は他利用者と楽しんで参加していたが、IT企業のホームページ作成では飲食店の実習とはうって変わって早々に帰りたいと言い出し、ふてくされて参加していた。実習を一時中断し面談したところ、ローマ字などが全く読めないことが分かった。ローマ字表を印刷し対応するなどしたがタイピングも全くできない状態であったことから、実習中のゴールを再設定して、「タイピングができること」とした。ホームページを早期に作成し終えた他利用者が本人のサポートに入り、ホームページ作成を終えることができた。

集団支援

基本的に休むことなくプログラムへの参加率も高いが、プログラムそのものではなく同世代との交流を楽しんでいる様子であった。送迎時も他利用者と長くいたいとのことで降車の順番を最後にして欲しいなどの要望があったため、それを了承し対応した。

不登校経験が長かったことから、様々な場面において経験不足感がみられた。本人もそれを感じていたため、役割を担おうとすることを拒んだ。明るく愛嬌のある性格から、ムードメーカー的な役割を自然と担っており、役割を設定せずとも他利用者から誘われ、様々な活動に参加していた。

4. 参加時の支援のポイント

当初は「苦手なことはやらない」「逃げる」という様子であった利用者が、徐々に所属感が高まることで、集団に居続けようとする様子が窺えた。それが、動機付けとなり、苦手なことへのチャレンジや打開策などについて支援者に質問することが多々あった。

本人は他利用者と自分を比較し、能力面などについて劣等感を感じている様子であったが、出席率が一番高いことなどを知ると、プログラムの参加姿勢に変化が見られた。その一例として、グループディスカッションでは、黙って見ていることが多かったが積極的に発言するようになっていくなど、参加に能動的となった。

また、世帯支援とその役割分担がポイントであったと考える。本人支援を本事業が、世帯支援を行政が担当するなどの役割分担を行い、連絡調整、共有などを密にして実施したことが、当事業への参加継続へと繋がった。

5. 終了に向けての支援

終了時の進路

通信制高校への進学を希望し、アルバイトもしてみたいとのことである。将来的には保育士か調理師になり、得た収入で母親に親孝行をしたいと話す。

終了に向けた支援

生活保護担当課との支援会議がカンファレンス前に開催された。卒業前に本人と家族が衝突し、仲違いしていたことから本人意向を家族が認めない可能性があったためである。カンファレンス前に家族との個別面談を実施するなど合意形成を十分に行い、カンファレンスに臨んだ。

カンファレンスには家族と生活保護担当課の支援者が参加し、本人より通信制高校進学の希望を伝え、家族も本人に高校へ進学し将来の夢を叶えて欲しいとのことであった。生活保護担当課と役割分担を行い、進学手続きを当事業が、進学費用の調整を生活保護課が担うこととなった。カンファレンス終了後には、生活保護担当課と当事業で支援会議を再度開催し、進学までに想定される課題とその対応策を入念に洗い出すなどの事前協議を行った。その結果、通信制高校入学までに本人と家族の衝突により何度も進学の道を諦めかけたが、事前協議にて練っていた対応策により、無事通信制高校へと入学することができた。現在も順調に学業に励み、アルバイトも始めている。対人緊張でイヤホンをつけることはなくなった。

6. 利用者による自己評価

Ⅰ. 生活リズム

前 0：夜更かしとひきこもり
後 6：毎日通う場所ができた

Ⅱ. 将来への希望

前 2：将来のことはあまり考えていなかった
後 8：将来自分のやりたい目標が見えた

Ⅲ. チャレンジする意欲

前 0：やる気がなかった
後 7：やる気が出た

Ⅳ. 視野や価値観の広がり

前 0：そんなに広がりはない
後 7：視野が広がった

Ⅴ. 仲間・人との繋がり

前 3：母親とのつながりはあった
後 10：人とのつながりが増えたことや友達ができた

Ⅵ. 家族との関係性

前 0：あんまりコミュニケーションがなかった
後 5：母親とのコミュニケーションが増えた

Ⅶ. 自己理解

前 0：全然分からなかったし、知ろうとする気もなかった
後 3：自分の特徴や苦手なことが少しずつわかってきた

ケース04：教育機関から繋がり、就職を決めたDさん

1. 繋がった経緯と見学時の様子

母子家庭で母と2人暮らし。身体を鍛えることを趣味としており普段は近くの公園でトレーニングして日々生活していた。小学生低学年の頃、トイレに行きたいと先生に依頼するも我慢を強いられ教室で失禁したことがトラウマとなり、それ以降頻回にトイレに行くようになり、人見知りが強くなった。小学高学年から中学まで教室にも入れなくなり不登校となったことから青少年センターへと通うようになる。中学卒業時は進学を希望せず、青少年センターからの紹介でアルバイト就労するものの、対人コミュニケーションの問題により短期間で退職し、その後19歳まで無業状態で生活していた。以前から関わっていた青少年センターの職員が本人へ情報提供をしたことにより当事業へ繋がった。

本事業の見学は2度実施しており、１度目の見学では参加を希望しなかったが、約半年後の2度目の見学で興味を示すようになった。学生時代のトラウマから対人緊張が強いと判断し、参加を促す前に個別対応を実施した。個別対応時は、安心安全な環境で過ごすことができるよう本人に希望を伺うと、自宅近くの公園を選択したため、現地で体を動かすワークを導入しながら対応した。個別対応終了後、同世代のメンバー2人が合流し小集団を実施。小集団になると口数は少なくなり、ゲームやSNSを見て自分の世界に入ってしまうため、スタッフを増員し、本人に介入する頻度を増やした。

2. 参加当初の状態

小集団時から口数は少なく、自身から話すというより聞き役に徹していた。入学式やプログラム開始2日目までは殆ど話すことが無く、スタッフに同世代と何を話していいのか、話しかけられてもどう返していいのか分からないと発言していた。事前のアセスメントにより趣味や興味が同じメンバーと同じグループにするなど対話が生まれる工夫をして交流促進を図った。序盤はスタッフが2人の間を取り持つ形で話をしていたが、プログラム終了後には2人だけで海辺で話すなど良好な関係へと発展した。その日の送迎車内で、話せる人が出来てよかったと言い、参加する目的が増えたと話していた。

3. 参加してからの変化

個別支援

対人関係で疑問や困ったことが起きると、帰りの送迎時間で個別相談に応じた。またトイレの頻度が上がった日は何らかのストレスがかかっていると鑑み、個別で声をかけ心境の確認をしていた。食事に関してのこだわりが強くこちらの用意した食事を取らないことも多々あったため、遠慮なく自分の希望は伝えてもいいことを伝えた。家族以外に希望や要望を伝える経験が少なかったためか当初は戸惑っていたが、徐々に自身の食べることができる食事の相談やお昼時間は外に出て自由に過ごしていいかなど、本人から希望を伝えてくれるようになった。

集団支援

グループワーク中もSNSを閲覧しワークに参加しないことが多々あり、集団活動へ参加することができずにいた。すぐに注意するのではなく、どのような心境なのかを確認すると集団活動へ参加したいという意思はあるもののどのように振る舞えば良いか分からず、不安や孤独感に感じるとスマートフォンをみるという行動に出ているとのことであった。対人緊張が強くならないようにグループの小集団化、役割分担をスタッフが配慮し、集団への参加経験を増やすよう工夫した。集団活動へ参加できるようになってからは日常的なコミュニケーションにも大きな変化がみられ、以降休日も他参加者と出かけるなどの様子もみられた。

4. 参加時の支援のポイント

１度目の見学時から対人緊張が非常に強いことを把握していたことや、本人も対応方法を持ち合わせていなかったことから早期離脱の可能性が高いと考え、安心、安全な環境作りをきめ細やかに実施した。

本人にとって安全と認識できる環境を作り続けるため、常に心境を聞き環境整備に対応したことやストレスがかかる場面や困難な状況に陥った際に、他者へ相談したことで状況を打開できたことで、安心して集団活動に参加するという経験を積み重ねることができた。参加継続という点において、安心、安全な環境づくりが重要であったと考えるとともに、その根底として決定権が自分自身にあり自己選択ができる状況も重要であったと考える。

5. 終了に向けての支援

終了時の進路

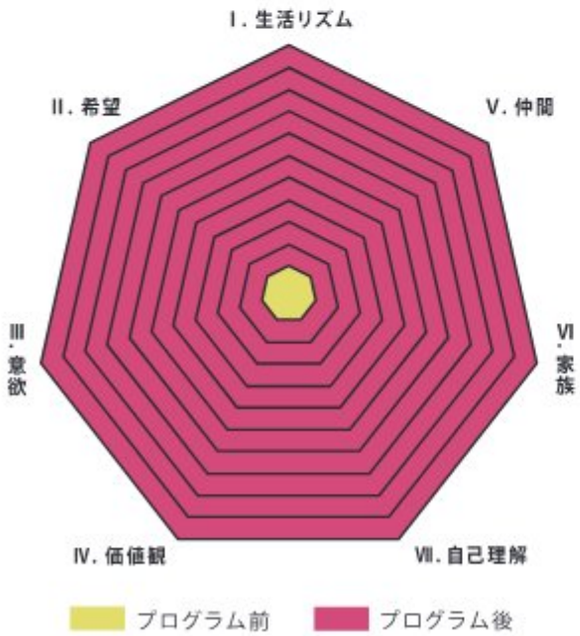
体を動かすことでエネルギーを発散できるとのことで就職を希望する。人と話すことに抵抗感は軽減したものの、接客のように常に対人関係を要する業務ではなく、なるべく少人数で作業の手順やルールがパターン化・マニュアル化されており、誰が担当しても成果物の品質を一定に保てるような業務を希望する。

終了に向けた支援

プログラム終了後に、本人、家族、関係機関とカンファレンスを実施し就労にむけて役割分担を確認した。その時、年齢が20歳であったため関係機関に引き継ぎをするのではなく、本事業が主体となり就職活動を実施した。目標が決まると、一つずつ課題を遂行できる能力に長けていたため、担当スタッフと一緒に、求人誌を集める、見る、希望職種を決定する、履歴書を作成するなどといった着手しなければならないタスクと期日を明確にして進めていった。「いつまでに何をすれば良いか」がわかれば、自分で取り組むことができるため、期間中は自ら清掃業の求人誌を持って相談したり、履歴書の添削を依頼したりと積極的であった。

趣味であるトレーニングも継続することができるような時間帯に働きたいと希望していたが、このようなことを面接で伝えてもいいのか迷っていた。しかし、その旨を面接でもしっかりと伝えることができていた。自分からメールや電話をすることが苦手であったが、就職が決まった時は、自らスタッフに報告をしてくれた。就職後は海外でトレーニングをしたい。そのために頑張って貯金をすると話しており、近い将来、彼の姿がテレビで観れるかもしれないと期待している。

6. 利用者による自己評価



Ⅰ. 生活リズム

前 0 : 昼夜逆転
後 10 : 寝る時間が増え、早起きするようになった

Ⅱ. 将来への希望

前 0 : 何も将来への希望がなかった
後 10 : カンファレンスのおかげで就職活動のやる気が湧いた

Ⅲ. チャレンジする意欲

前 0 : 不安と心配
後 10 : 企業実習のおかげでチャレンジする意欲が湧いた

Ⅳ. 視野や価値観の広がり

前 0 : 視野・価値観の広がりがなかった
後 10 : 視野・価値観がさらに広がった

Ⅴ. 仲間・人との繋がり

前 0 : 無言
後 10 : メンバーと仲良し

Ⅵ. 家族との関係性

前 0 : 家族との会話が続かない
後 10 : 家族との会話が増えた

Ⅶ. 自己理解

前 0 : 自分のことがよく分からなかった
後 10 : 自己理解のプログラムのおかげで自分を知れた

ケース05：離島から繋がり、進学を決めたEさん

1. 繋がった経緯と見学時の様子

母親が病気がちであったため父親が仕事に家事育児と奔走している家庭で育つ。地元の中学を卒業し、高校へ進学するも友人とコミュニケーションが次第に上手く取れなくなり、孤立して2年時に自主退学。その後、アルバイトをしながら生活していたが、本人の生活状況をよく思っていない父親から指導を受ける。しかし本人は生活改善の必要性を感じていなかったため、度々口論に発展していた。生活困窮の家庭であったため行政職員が支援しており、本事業を紹介。本人も同世代との交流を望んでいたことや、退学後に高等学校卒業程度認定試験（以下、高認試験）の勉強をしながら資格取得を目指しており、資格取得後の進路選択について考える機会にしたいという理由から参加を決意。見学時では、将来について考えたい、普段できないような体験をしたいという思いや本事業に参加してどのような体験ができるのかなどの質問が多々あった。体験時には小集団で一緒になった他参加者とすぐに打ち解け仲良くなり、終了後には一緒に参加する相手の様子を見て安心したと話していた。体験時の交流面では問題はないものの、挙動や所作に様々な課題が見られたことやコミュケーションが特徴的であった。入学面談で父親から生活状況の改善や早期自立を望んでいることが伝えられた。

2. 参加当初の状態

大人しい性格で、自分から積極的に話かけることはないが、話しかけると目をみて返事をしてくれていた。穏やかで話しかけやすい雰囲気があるため、周りは話かけていくが、「うん」や「そうです」などと端的に返事をするため、コミュニケーションが続かない場面が見られた。他者との交流について、緊張している様子は無いように見られるが、実は緊張や不安があり疲労していることがあった。どうしていいかわからない時は、1人でゲームをして安全な状況を自分でつくりながら参加していた。

3. 参加してからの変化

個別支援

プログラム中に、積極的な発言は無いが、送迎車内では自ら話しかけ、帰る直前まで話をするなど会話が途切れることは無かった。会話すること＝本人が求めている欲求であると捉え、帰宅する直前まで会話をしてフラストレーションが溜まらないよう関わった。また、プログラム参加中も自主的に高認試験の勉強に励んでいたが、一人で受験会場にいくことに不安があると相談があったため、事前の試験会場見学や会場到着までの行程作成をサポートした。結果、準備や到着等に問題はなく受験し、合格することができた。

集団支援

集団活動において、相手の気持ちを察したり、相手の表情を汲み取ることが苦手で、プログラム中も無意識に相手を不愉快にさせることがあった。関係性の構築が出来た頃には、気心知れたメンバーには、「何故、相手が不機嫌なのか？」「どうしてそのような反応をしたのか？」を聞いたり確認したりする場面が見られた。スタッフがファシリテーターになり、他メンバーはどう思うのか発言してもらい、他者視点を身につけていった。他のメンバーから本当に想像が出来ないのか問われる場面もあり、本人の気持ちを正直に伝え、教えてくれたメンバーやスタッフに毎回感謝していた。幼い頃から、両親や周囲の人に相談をしたことが無いと言っていたので、どんな些細な確認でも丁寧に返答することで、好ましい関わり方を身につけていった。

4. 参加時の支援のポイント

本人に悪気はないが、社会一般に通用している常識や見解から逸れた発言や行動により他参加者が困惑するような場面が多々あった。幼少期に獲得するはずであった体験、経験が明らかに不足していることが影響していると考え、本人の自尊心を大切しながら再獲得できるよう、日々のコミュニケーションで気づきを与える工夫をして関わった。また、プログラム後半は自身がコミュニケーションに躓くと、相手と関わりを断つなど逃避する傾向があったため、本人へのアプローチだけでなく他参加者へもアプローチ（事前の配慮依頼や事後の釈明）することで集団活動へ参加できる環境を整え続けた。結果、常に集団に所属することができ、卒業式直前は卒業したくないと駄々をこねるほどプログラムの追加延長を望んでいた。

5. 終了に向けての支援

終了時の進路

ITの仕事に就くために、専門学校に通うことを決意。また、実家からの独立も踏まえアルバイトにより貯金を貯めることとなった。

終了に向けた支援

本人の進路選択におけるフォローアップの体制を整えるため、以前から関わっていた行政職員と父親参加のカンファレンスを実施。本人の進路選択だけでなく、プログラム中の本人の様子や進路選択までに努力したことなどを伝えるとその様子に父親は驚いていた。しかし、父親はITという分野や職種がどのようなものあるかをイメージできず、本人の希望職種へは否定的であった。そこで、ITの分野や職種についての説明を十分に取るなどして理解促進を図り、内容理解のもと、納得いただいた。その際に、父親より本人の自己実現を応援する旨の発言と併せて、家族としての役割を本人にも担ってほしいとのことで生活状況の改善を訴え、その発言を聞いた本人も納得し改善することを約束した。その後、専門学校入学までの取り組みやそのスケジュールなどフォローアップ体制と役割分担を実施し、奨学金の申請などの学費に関わることを行政職員がサポートし、進路相談やモニタリングを本事業が担当することとなった。その後、学費を貯めながら勉強に励んでいる。先日、貯金の目標金額を達成したとの連絡があった。人はやればできるものだなと感心し、今後が楽しみである。

6. 利用者による自己評価

Ⅰ. 生活リズム

前 7 : よい
後 9 : よい

Ⅱ. 将来への希望

前 6 : 未来への予測ができない
後 9 : 自分の進路をイメージできる

Ⅲ. チャレンジする意欲

前 7 : 何をすればいいかわからない
後 9 : 自分の得意なことを活かしたいと思った

Ⅳ. 視野や価値観の広がり

前 7 : よく見えていない
後 9 : もっと周りをよく見ようと思った

Ⅴ. 仲間・人との繋がり

前 4 : あまりない
後 9 : 良い友達ができた

Ⅵ. 家族との関係性

前 5 : ふつう
後 8 : ふつう

Ⅶ. 自己理解

前 6 : 周りの人と調和がとれない
後 9 : 周りの人をよく見るようになった

ケース06：児童福祉分野から繋がり、進学を決めたFさん

1. 繋がった経緯と見学時の様子

母子家庭に生まれ育つが経済的な理由から5歳まで児童養護施設で生活をする。母親の再婚を機に家庭で生活をするようになるが、養父からの暴力により児童相談所に一時保護されることが度々あった。母親が離婚し養父からの暴力はなくなったが、その後母親からも暴力を受けることになる。中学校3年時に県立高校を受験し合格するも、入学手続き直前、母親の意向で高校進学を見送られる。中学卒業後は母親と同じ職場で働き、収入は母親に搾取されていた。その間も母親からの暴力が続いていたため、自ら児童相談所に保護を願い出て再度一時保護となる。児童相談所の職員の話によると問題行動などは一切なく自ら外国語などの学習をして過ごしており、他者との交流においても特に気になることはないとのことであった。18歳を迎えるにあたり、自立や将来設計について学ぶ機会が必要と考えていた児童相談所職員が当事業内容を情報提供し、本人が参加を希望したため見学に至る。見学時は児童相談所職員が同伴で来所。自ら受け答えをすることができ、当事業卒業後は高校進学するため、働いて学費を貯めたいと話す。他者との交流については期待をしているが、少し緊張しているとも話していた。

2. 参加当初の状態

他者との交流については緊張等はなく、体験時から問題なく集団活動へ参加できていた。帰りの送迎時は長く他利用者と居たいという理由で送迎順を最後にしてほしいという要望があり、そのように対応した。迎えの送迎時は乗車するなり話し始め、事業所に到着するまで会話が途切れる事はほとんどなかった。事業所に到着してからも基本的には他者との交流を楽しんでいた。
プログラムが始まると集中して取り組んでおり、他利用者と比較すると意欲、態度、能力などの面において高水準であった。

3. 参加してからの変化

個別支援

送迎時、他利用者が降車すると会話の流れが変わり、当事業卒業後の進路相談が毎日のようにあった。高校進学を希望していることもあり、どのような高校が近くにあるのか、全日制と通信制の違い、高校卒業後の進路、居住や生活スキルなどについての相談が多かった。将来の希望職種ははっきりとしているが、その職に就くまでの方法が分からないとのことだったので、個別進路相談を設けるなどして対応したことや、卒業後も希望職種の専門家を外部講師として招聘し進路講座を実施した。

集団支援

基本的な作業能力や対人コミュニケーションに問題はなく、その面における支援は必要なくむしろ高水準であった。しかし、児童相談所に一時保護されている状況であったため、外出が容易でなく、他利用者同士がプログラム終了後や休みの日に集まり遊んでいるが本人は参加できないとの理由で、送迎距離を伸ばして欲しいなどの要望が多々あった。その状況を鑑み、基本のプログラム終了後も追加でプログラムを実施。公園でスポーツをしたり、コミュニケーションの時間とするなどして対応した。

4. 参加時の支援のポイント

本利用者はプログラム参加中に18歳を迎えたことで一時保護所を退所となり、一人暮らしを始めることとなった。要支援の観点から本事業だけでなく、各分野においての支援担当者が配置されることになったが、事前の想定として支援関係者が多いことで本人が混乱しないよう役割分担を明確にする必要があった。一時保護所退所時に児童相談所を中心としたケース会議で役割分担がなされ、当事業は利用者本人と接する時間が多いことから基本的な相談窓口としての役割を担った。プログラム参加だけでなく、生活面などにおいても相談を受け、必要があれば相談先を紹介するなどした。支援体制とその役割が明確化されたことで、本人は混乱することなくその後の生活や進路について活動することができた。

5. 終了に向けての支援

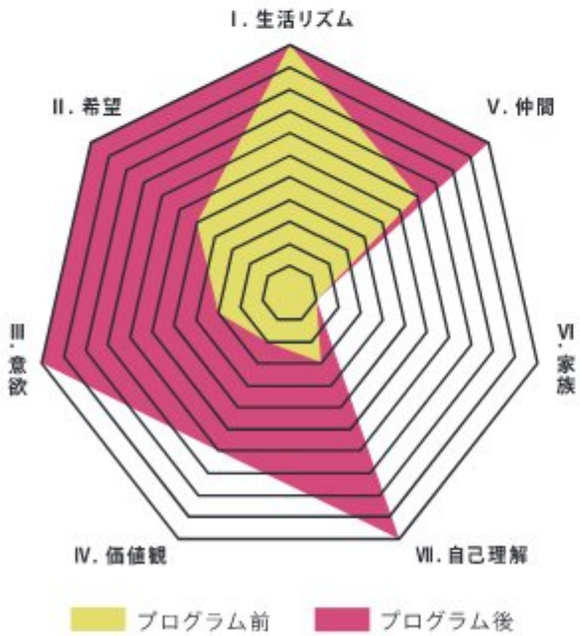
終了時の進路

将来は児童を支援するソーシャルワーカーになりたいと決意し高校進学を希望した。また、同世代との交流も目的として日常的なスクーリングがある通信制高校への進学とアルバイトに取り組むこととなった。

終了に向けた支援

プログラム参加中に一人暮らしを開始したことから、自宅で一人になる時間が多くその環境に孤独感を抱いており、他利用者の送迎に乗車したいという要望があったため承諾した。また、プログラム終了後も事業所に訪れていいかなどの問い合わせもあり、職員が可能な限り本人と交流の時間をとった。その際の相談では一人暮らしになったことで孤独感を抱えていることやこれまでの過去や家族についての相談が大半を占めた。進路や生活面においては支援体制が整備されていたので対応することができていたのだが、進路に向けた手続きから合格までの期間があったため孤独感が増大し、自己肯定感や効力感の低下も予想された。そのため、追加でプログラムに参加していた他利用者と交流できる機会をつくるなどして対応した。その後、アルバイトが高校進学より先に決まり他者との交流が増えたことやプログラムに参加していた他利用者との交流が続いたことにより、自己肯定感や効力感は低下することなく、順調に高校へも進学することができた。その後も、事業所に遊びに来て日々の様子を話してくれるとともに、プログラムに参加していた他利用者と今でも交流が続いている様子が伺える。

6. 利用者による自己評価



Ⅰ. 生活リズム

前 10 : 良かった
後 10 : 変わらず良き

Ⅱ. 将来への希望

前 4 : 希望職種一筋
後 10 : いろんなものを体験したりしたい

Ⅲ. チャレンジする意欲

前 2 : あんまりチャレンジしたいと思っていなかった
後 10 : 色んなことに挑戦してみたいって思ってる

Ⅳ. 視野や価値観の広がり

前 1 : 価値観をわかっていなかった
後 6 : 自分の価値観をなんとなくだけど知れた

Ⅴ. 仲間・人との繋がり

前 6 : 人と繋がる機会があまりなかった
後 10 : たくさんの人と楽しくできた

Ⅵ. 家族との関係性

前 0 : 離れて暮らしている
後 0 : 変わらない

Ⅶ. 自己理解

前 2 : 自分のことを知っているようで全然しれていなかった
後 10 : プログラムで自分の性格を知れた

ケース07：医療機関から繋がり、進学を決めたGさん

1. 繋がった経緯と見学時の様子

中学校在籍時から自分の気持ちを相手に伝えることが苦手で無理して通学していた。県立高校に入学するが、入学後すぐに不登校となり休学を経て正式に退学。本事業につながるまでは自宅と不登校になったことがきっかけで通い出したメンタルクリニックのみの生活が続く。社会との接点は少なかったが、家族との会話は多かったとのこと。通っているメンタルクリニックの心理士から、本事業の情報を聞いた母親が問い合わせて見学の調整に至るが、その時本人は外に出たくないと考えていた。しかし、これまで同クリニックの心理士にお世話になっていたこともあり、見学もせず断ることが難しかったという理由で見学に来ており当初は参加をしない前提で仕方なく訪れたということを後に知る。

見学は母親同行で来所。初回はもの静かで、控え目であった。髪の毛で顔の両側半分が隠れ表情を確認するのが難しく、質問したことへの回答は「うん」「ううん」の二つしかなかった。本事業への参加は体験終了後にご自身で決定していい旨を伝えるとともに、体験の構造（個別体験から小集団）も併せて伝えた。説明時の様子から対人緊張度が非常に高いと判断し、個別体験を他利用者より多く組み不安や緊張度の軽減に努めた。

2. 参加当初の状態

見学時の様子から対人緊張が強いと判断し、小集団の体験に関しては本人を含む2名という最小人数でスタートし徐々に人数を増やしていった。小集団対応の後半には頭髪は整い、会話も増え、表情も明るくなっていった。体験時に、同世代との交流に慣れたいことや社会に出たいという希望、同世代との交流における過去の失敗体験から嫌われるのでないかという不安があることを知る。

3. 参加してからの変化

個別支援

プログラムがスタートすると、支援者に対しての身体接触が増えた。まずは受け入れ、様子を見ながら、長く継続するとコミュニケーションの誤学習につながる恐れもあることからコントロールする必要性を伝えることも検討したが、関係性が構築されるとその行動は減っていった。その後、フラッシュバックが複数回起こるが１回目の発作時に本人の望むサポートやリラックスできる環境の把握につとめ、以降は把握した内容通りに対応した。その後、フラッシュバックはなくなった。その後、希死念慮があることを知る。本人より、プログラムがない日もスタッフと話しをしたいとの申し出があり、特別対応をする。特別対応の内容は本人との会話が中心であった。

集団支援

過去の失敗から、偽った自分で居続けようとしていたが、自己理解・他者理解を通じて自分らしさを模索し始めたタイミングで、様々な役割にチャレンジできるようスタッフから本人への役割依頼を実施した。かつ、集団活動においても他利用者とのマッチングを繰り返し、自身の強みが集団で活かされたと感じる環境を整え続けた。

4. 参加時の支援のポイント

参加当初は自己評価が低く、自身が場を乱しているのではないかという不安感が大きかった。その理由をたずねると、過去の失敗体験として、自身の言動により集団からはぶられたことがありその経験が強く影響しているとのことであった。本人と一緒に過去の失敗体験の振り返りを行い、その振り返った内容を踏まえ、自身のコミュニケーションの特徴や苦手な状況の回避方法などについて考えるとともに失敗の余地についても一緒に考えた。本人の努力があったことに加え、常に仲の良い友人ができたことで集団へ所属することへの不安感は次第に減っていった。集団活動に参加し続けることができた経験は達成体験へと繋がったと考える。以降、参加当初からは考えられないほど、明るく、社交的な性格へと変化した。過去の振り返りや改善に向けた具体的な行動なども重要であるが、常に本人にとっての安全と安心を確認しながら進めたことがポイントであったと考える。

5. 終了に向けての支援

終了時の進路

しばらくはメンタルクリニックの受診を継続しながら、高校卒業資格取得のために通信制高校への入学と放課後等デイサービスの利用を希望。アルバイトもやってみたいとのことであった。

終了に向けた支援

卒業前のカンファレンスにはメンタルクリニックの医師や心理士、保護者が参加した。本人の進路希望を共有することに加え、保護者の意向、医師や心理士の見解も再確認した。保護者としては本人が高校卒業資格取得を目指したことは嬉しいと感じるとともに、新たな環境への適応に失敗し、以前の状態に戻ってしまわないかという不安があるということであった。保護者の考えを事前に確認していたため、通っているメンタルクリニックの医師、心理士に本人の進路希望についての見解を伺った。医師と心理士としては本人の治療方針としても特に問題はなく、今後完治も見込めることから、本人の進路選択を推奨するとのことであった。その結果、進路実現に向けた役割分担を実施し、本人と家族で通信制高校への入学手続き、当事業所で行政手続きのサポートを実施することとなった。その後、通信制高校入学と放課後等デイサービスを併用して高校卒業資格取得に向けて頑張っている。以降もプログラム参加メンバーとも交流があることや、アルバイトを開始したなどの連絡がある。アルバイト先を訪問すると、ユニホーム姿が可愛く、似合っていた。

6. 利用者による自己評価

Ⅰ. 生活リズム

前 2：週5日は昼夜逆転
後 9：寝る時間が増え、早起きするようになった

Ⅱ. 将来への希望

前 0：最悪死ねばいっかって思っていた
後 8：通信だけど高校行きたいと思たし、何年後かにまた会えるような人間になっていたいって思えた

Ⅲ. チャレンジする意欲

前 1：どうせまた失敗する、自分じゃ何もできないって思っていた
後 7：失敗してもいいからやってみようと思えた。相談出来る人

Ⅳ. 視野や価値観の広がり

前 0：「自分が思っていることは他人も思っている」と思っていた
後 6：人がやっていることとか感じていることは自分が思っている以上にたくさんあるし、大切にしていることも人それぞれ

Ⅴ. 仲間・人との繋がり

前 3：病院の人、中学の時の友達3人ぐらいとしか繋がりがなかった
後 7：メンバー、スタッフ以外だと公民館の人と少し話すようになった

Ⅵ. 家族との関係性

前 7：自分の部屋にこもっている事が多かった
後 8：リビングで話すことが増えた

Ⅶ. 自己理解

前 1：全然分からなかったし、知ろうとする気もなかった
後 8：自分の特徴や苦手なことが少しずつわかってきた

ケース08：就学体験プログラムに参加し、進学を決めたHさん

1. 繋がった経緯と見学時の様子

中学校在籍時は部活動や生徒会活動などに励み進学を希望するも保護者と意見が食い違い、合意へと至らなかったことから自暴自棄となり非行を繰り返すようになる。基礎学力に問題はないものの、受験前に非行で補導されるなど十分な受験勉強ができる状況ではなく、進路未決定のまま中学校卒業となる。非行があったことから青少年センターが支援しており、本事業へ紹介され繋がった。青少年センターの職員が同行し当事業の見学や体験に参加した。中学卒業後は孤立しており、集団活動への参加を強く望んでいるとのことであったが、家族との面談には拒否感を示し、可能であれば実施したくないと希望していた。保護者同意がなければ参加が難しいとの理由には納得するも、同席したくないとのことで、家族との面談は保護者と当事業職員により実施。保護者面談では進学を応援したいものの経済的な理由を抱えていることや日々の言動などにより、利用者本人へどのように関われば良いかなどの悩みを抱えていることが分かった。また、現状を打開したいが、中学卒業と同時に相談先や関わってくれる支援者が減り、逼迫していたと話しており、世帯として社会から孤立している様子が窺えた。保護者より参加同意を得ることができ、当事業へと参加することができることとなった。

2. 参加当初の状態

参加当初から対人緊張は見られず、初対面の相手への気遣いや場の空気を察知した行動ができていた。プログラム参加当初からプログラムの内容や目標、スケジュールを意識し全体への声かけをするなど、遂行能力が高かった。しかし、プログラムを終え送迎車に乗車すると自身の意思決定を否定されたことよる家族の不仲などを話し、「家に帰りたくない」「家庭内に居場所がない」などと話すことが多々あった。以降も同様の状態が繰り返されるが、遅刻や欠席はなく、当事業への参加がエネルギーとなっていることが窺えた。

3. 参加してからの変化

個別支援

進学意欲は非常に高いものの、年下世代との通学にあたっては、疎外されるのではないかという不安を感じており高校認定資格取得という選択肢しか持っていなかった。就きたい職業がはっきりとしていたことから個別に時間を設け、その職業への進路課程や選択肢を一緒に調べるなどのキャリア支援を実施した。進学方法については、多様な進路課程の中から自身にあった進学・通学方法を模索するなどの進路面談を実施した。結果として、高校課程と専門学校課程を同時に履修できる学校があることや、就学支援金や奨学金を活用した進学などの情報を知り、卒業までにかかる費用を具体的に把握できたことで、金銭面に関する合意を保護者から得ることに繋がった。

集団支援

プログラムが進むにつれ、他利用者が徐々に意見や考えを述べることができるようになると、強い口調で自らの意見を押し通す場面が見られた。他利用者と衝突するようになるとSNSの友人との交流することが増え、次第に集団活動から遠ざかった。本人と面談により、意見の食い違いは自身を否定されたという認知になっており、そのように認知すると他者と距離を置いたり、関係を断つという行動へと至っていることが分かった。他者が存在を否定しているわけではないことを伝え、その後の関係修復方法について、他利用者の協力も得ながら進めた結果、最後まで孤立することなくプログラムに参加することができた。

4. 参加時の支援のポイント

基本的な能力や意欲が高いにも関わらず、非行を繰り返し進学が困難になっていることに違和感があった。就学体験プログラムの集団活動を通して、利用者本人の強いこだわりや極端な判断により対人コミュニケーションにおける齟齬があることが明らかとなった。就学体験の振り返りと併せて、普段の言動についてのフィードバックや思考のすり合わせを行い、本人自身の特徴理解を深めていった。その結果、自身の言動やこだわりが表出した際には、対応方法を支援者に尋ねて、学ぶようになっている。社会人基礎力の指標と照らし合わせながらフィードバックを実施したことから、個人の性格に否定感情を抱くことなく、社会人になっていくために必要なことを身につけようという、獲得課題として認識していたことが大きなポイントであったといえる。

5. 終了に向けての支援

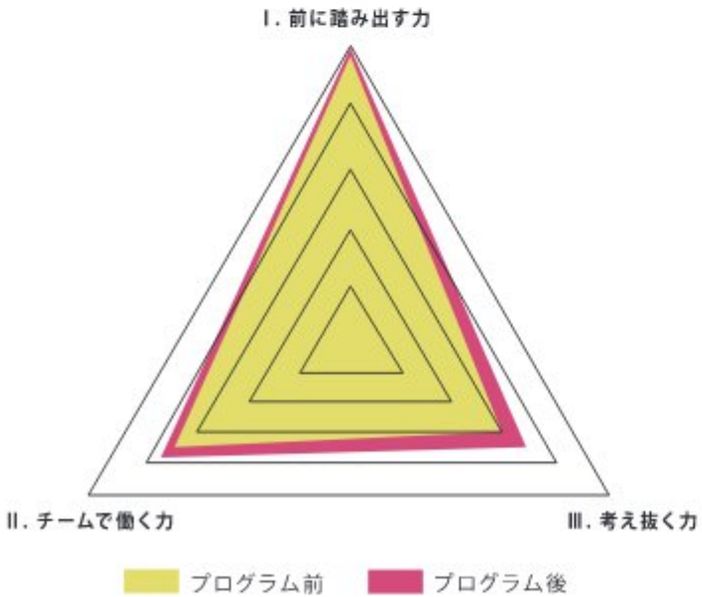
終了時の進路

高校卒業同等資格と専門学校卒業資格が同時に取得可能な専門学校への進学を決め、学費貯蓄のためにアルバイト就労をすることを希望した。また、敬遠していた家族との話し合いも実施の意向を示した。

終了に向けた支援

これまで、保護者の合意を得ることができず進学を頓挫したことにより、報復のような形で非行を行なっていた。そこで、プログラム参加中も絶えず保護者との面談を繰り返し利用者本人の成長や家族からの支援が有効に働いた結果であることを伝え、家族間の衝突を起こさないよう間に入ったり、世帯支援を実施した。その際には家族の意向や支援可能な範囲などを丁寧に聞き取り、保護者に伴走して打開策を練ることや家族間合意を支援した。その結果、本人の意思決定に保護者が理解を示すとともに、本人の行動が保護者を意識した行動へと変容し、互いに歩み寄りを見せた。オープンキャンパス等へは保護者が送迎するなどの様子も見られ、家族との関係性が自己実現へ大きな影響を及ぼした結果となった。その後も奨学金や入学手続きなどで間に入った支援が必要であったが、利用者本人もアルバイト就労し学費貯蓄に励み家族への協力姿勢を見せ続けたことで、保護者が本人を理解し、支援を継続することができた。

6. 利用者による自己評価



〔社会人基礎力の3つの能力〕

Ⅰ. 前に踏み出す力

前：15点中 14点　　後：15点中 15点

わからないこともみんなで考えることができた。自分の考えを持つことができて、それをみんなに共有することができた。

Ⅱ. チームで働く力

前：30点中 21点　　後：30点中 23点

自分の見えなかった視点から見たり、話を聴くのが楽しかった。自分の得意なこととグループの人の苦手なところをしっかり見極めて役割分担できた。

Ⅲ. 考え抜く力

前：15点中 9点　　後：15点中 11点

何が必要な情報で何が不要なのかが難しかった。何から決めるかどうやるかなどを決めて、見直しながら取り組めた。

集団活動は他者との交流を持つことで、自らの行動や思考を振り返ることができる機会となります。また、プログラムや個別支援にて利用者本人の成長を支援することも重要ですが、家族への支援も同じく重要です。集団と個別の両輪による支援と、世帯を含めた包括的な支援を実施しました。

ケース09：就労体験プログラムに参加し、就職したIさん

1. 繋がった経緯と見学時の様子

小学校高学年の時から容姿をバカにされるなどのいじめを受けており中学校在籍時はいじめの影響により体調不良が続く。体調不良が続いたことにより、保護者がいじめにあっていることを知る。保護者が学校側と協議を重ねた結果、療養を優先し中学卒業を迎えることとなった。療養中から青少年センターに通っており18歳まで利用していた。すでに過卒生となっていたが青少年センターの職員が、利用者本人へ本事業の情報を伝えるなどして繋がる。参加動機としては、何か行動を起こさなければと考えていたが、どのような場所に行けば良いか分からず焦っていたとのことであった。見学時は青少年センター職員同行で来所し、「家族以外の人と話せるようになりたい」「自分に自信をつけたい」「自立したい」と話していた。本事業より保護者同伴の入学面談実施を伝えると、一人で面談に臨みたいと希望したことから、家族の前で話しづらいことがあるのかと確認した。しかし、家族関係は良好で話しづらいことはないとのことで、入学に関しては自らの課題克服であるため一人で臨みたいという希望であることが分かった。本人の希望を尊重し、入学面談は本人と本事業スタッフで実施した。その後、保護者と参加同意を得る面談を実施し入学へと至った。

2. 参加当初の状態

プログラム参加当初は寡黙で他利用者と話す場面もほとんどない状態であった。緊張度も高く自ら他利用者との交流を避けているようにみられた。しかし、緊張度合いが高い利用者に見られるスマートフォンを触ることや気分転換をするなどの様子はなく、事業所内で居続けることができていたことから、他者と関わる方法や話すきっかけ作りに苦手感を持っているようであった。

3. 参加してからの変化

個別支援

いじめが原因の不登校や無業状態が長かったことから、家族以外とのコミュニケーションが不足していた。そのため、他者との会話でどのように話せば良いのか、プログラム中の質問にどのように返答すれば良いのか分からず、「特にない」「任せる」という返答が多かった。スタッフとの面談にて、自身がどのように感じたかや考えているかを述べるだけでよいと伝えると、徐々に発言内容が変化した。また、それまで本人からサポートの要請は少なかったが、自身の考えなどが話されるようになると他者へサポートを要請することができるようになった。

集団支援

参加当初から寡黙であったため、利用者本人とどのように関わって良いか他利用者も戸惑っていた。プログラムを実施するにつれ、グループワークなどの集団イベントがあったことから話すきっかけや共有できる物事が増えるようになる。その結果、自然とコミュニケーションの量が増え集団意識を持つようになり、同時に役割を担うことを支援したため常に集団活動に参加することができた。また、本人が他者へ素直に感謝や労いを声かけできる性格であったことから、他利用者からも慕われるようになる。

4. 参加時の支援のポイント

感情表出が少ない利用者であったが、プログラム中盤以降では不適切ながらも感情を他者にぶつける場面が見られた。その行動を感情表出ができるほど、スタッフや他利用者と信頼関係ができ安心できる環境になっていると判断し、抑制するのではなく傾聴に努めた。その後は本人が落ち着きを取り戻した後に、好ましい表現や言語を一緒に考えるなどして支援した。プログラムや集団活動を通して、言語表現力が高まったことからサポート要請をすることができるようになり失敗経験をする前に相談ができるようになった。また、プログラムを休むことなく、職業準備性における基本的労働習慣などの項目を容易に達成したことで徐々に自信をつけ、企業実習では一人で実習に臨むようになった。

5. 終了に向けての支援

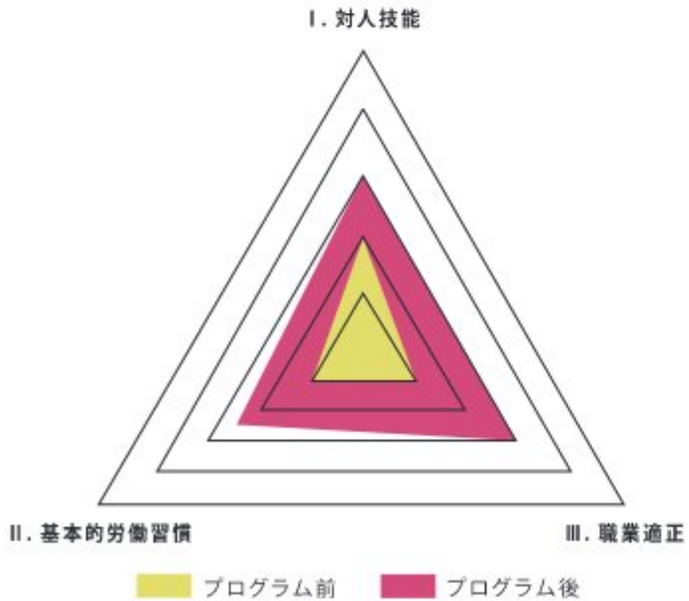
終了時の進路

アルバイト就労を希望し、さらに自信がつけば高校入学や高校卒業認定資格の取得に挑みたいと希望した。

終了に向けた支援

卒業前に保護者とカンファレンスを実施した。カンファレンスでは、保護者より利用者本人が家庭内で日々の活動の様子を報告してくれていることが伝えられた。これまでの振り返りなどをせずとも、日々の充実や本人の成長を保護者が実感していることが分かった。また、家族が本人を心配してサポートを要請しようとすると、本人が家族へ自分できることは自身で実施し、できないと感じた際はスタッフに相談すると発言したことで、卒業後の進路を心配していた保護者も安心していた。本人の主体性を尊重した結果、求人探しやエントリー、就労先への通勤で利用するバスの乗り方などはサポートを要請したため個別計画として設定した。履歴書作成や面接対策はプログラム中に実施し自信をつけることができたという理由から利用者本人が自力による挑戦を希望した。就労に向けたサポートを確認しカンファレンスは終了して、本人からのサポート要請を待った。

6. 利用者による自己評価



〔職業準備性ピラミッド〕

Ⅰ. 対人技能

前：10点中 4点　　後：10点中 6点
以前は言いたいことがあまり言えなかったが、挨拶もできるようになったし、言いたいことも言えるようになった。

Ⅱ. 基本的労働習慣

前：10点中 2点　　後：10点中 5点
報・連・相もできるようになり、社会人講話を聴くとやっぱり大事なんだと思った。

Ⅲ. 職業適正

前：10点中 2点　　後：10点中 6点
これまで、何も経験したことがなかったが、いろんな経験をしたことで、自分の苦手なことやできそうなことの理解ができた。

支援をしているとその対象者が躓かないか不安になりますが、対象者の変化や成長を適切に評価することも大事です。主体性を尊重しながら、苦手なことやサポートを必要とする部分を把握することに努め、進捗把握においては期限やサポート要請の基準を決めて、相談ができる体制を常に整え続けました。

ケース10：複合的な支援を要したケース Jさん（世帯からの独立を選んだケース）

1. ケース概要

母子家庭で生まれ育ち、母親と二人で生活。母親の結婚、離婚の度に転校を繰り返しており、希望していた全日制高校へは行けず通信制高校に入学し、アルバイトでその学費と生活費を稼いでいた。生活困窮世帯であったため行政職員が支援しており本事業を紹介される。アルバイトを休み参加しなければならないことにより学費と生活費の心配をして参加を躊躇していたが、行政職員が他部署や助成団体と連携し、補助を受けて参加できることとなった。プログラム参加中は熱心に取り組み、卒業後は全日制高校への編入を検討していた。

2. 自立を選択した経緯

プログラム参加中に母親が交際していた男性と入籍し、別市町村へと移り住んでしまい家賃などの生活費を支払わなければならない状況となってしまう。本状況になったことにより、自身も世帯から独立しアルバイト就労もしくは一般就労することや全日制、定時制高校編入を視野に入れた自立を決意する。

3. 支援者の関わり

本利用者への支援では、金銭面、居住面、生活面、就労・就学面など支援範囲が多岐に渡ることから、行政、他機関、専門団体等と連携した包括的な支援が必要とされた。本事案対応の開始時には、各専門分野の支援機関へ協力要請と支援の役割分担を共有するなどして支援チームを発足した。また、利用者の心情にも最新の注意を払いながら進めなければならなかった。家族がいなくなったことに孤独感を感じ、自己肯定感が下がってしまう可能性があることに加え、本人対応が必須となる手続きなども大量にあることから、混乱をきたし疲弊してしまう恐れもあった。そのため、常に利用者本人の心情を把握しながら、本事業が基本的な窓口となり利用者の状態を見極め、情報を伝えていくなどして対応した。

| 居住支援 |

住所不定は各種手続きが進まない1番の要因となるため、居住支援は早期に解決する必要があった。まず、これまでの住居がなくなってしまうことから、新しい住居とそれまでの間に生活する仮住まいを探す必要があった。仮住まいに関しては、転居先が決まるまでの間、障害福祉サービス事業者などが運営するグループホームやショートステイの一部屋を一時借用する支援を実施した。転居先は居住支援を実施している民間団体と連携し連帯保証人や審査の問題を解決し、新たな住宅を確保することができた。その後、行政や民間支援団体へ協力を仰ぎ、生活に必要な家具や家電の寄付を受け、本人に手配した。

| 就学支援 |

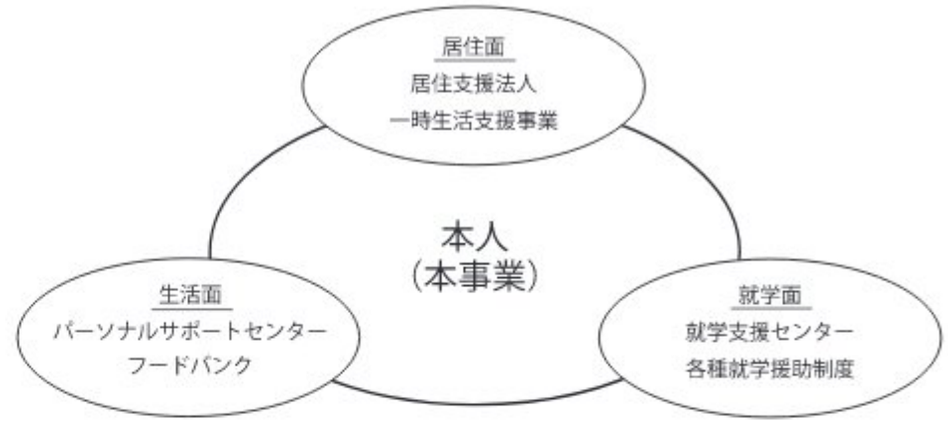
本利用者は当時、通信制高校へ在籍しており、全日制高校への編入も検討していた。しかし、就労しながら高校卒業を目指すこととなり、定時制高校への編入へと切り替えることとなった。そのため、定時制高校へ見学を依頼し体験授業に参加して就学のイメージが持てる支援を実施した。編入手続きでは当事業の職員が申請などへ同行し、身元保証などの問題に関して対応した。その後、学業継続に向けた補助金などの申請を行い、無事編入することができた。編入後も、就学継続のために、本人の同意を得て、生活環境や関わっている支援機関などと情報を共有し、アフターフォロー体制を整備した。

生活支援

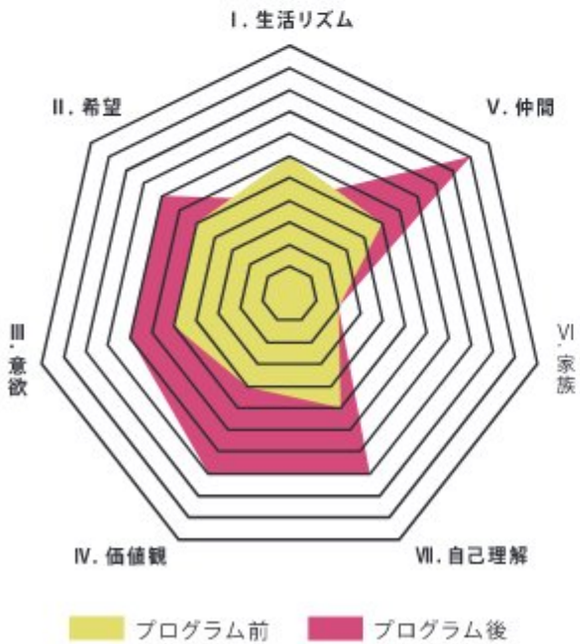
住宅や生活費などの経済面を整備することに併せて、整備するまでの間の食料・生活用品などを手配する必要があった。食料に関してはフードバンクを運営する団体へ食料支給を依頼し、生活用品に関しても民間団体からの寄付を受けるなどして手配した。住宅や生活費に関しては、生活困窮等を支援する行政機関と連携し、助成を得ることができた。その後、家計運営などに要する金銭管理の方法等のレクチャーを個別支援として実施し、自立に向けた支援を行った。

経済面に関してはその後のモニタリングにおいても収入と支出のコントロールができているか確認を行っている。生活面が安定してきた後、アルバイト就労に向けた支援を実施し、無事、アルバイト就労をすることができた。

〔関係機関のネットワーク〕



利用者による自己評価



Ⅰ. 生活リズム

前 5：仕事があったから、生活リズムは整っていた
後 3：生活環境が変わったことで、生活リズムが崩れた

Ⅱ. 将来への希望

前 4： 何をやればいいのか分からない状態
後 6： 何をしたいのか少しずつ固まってきた状態

Ⅲ. チャレンジする意欲

前 4：誰かに頼まれたらやる感じ
後 6：自分でチャレンジしようと意思がついた

Ⅳ. 視野や価値観の広がり

前 3：他の人の価値観、自分の価値観に目を向けることがなかった
後 7：自分や他人が大事にしている価値観は何か考えるようになった

Ⅴ. 仲間・人との繋がり

前 4：バイトと家の往復生活で、特定の人しか関わっていなかった
後 9：色んな人と会って話せた

Ⅵ. 家族との関係性

前 1：ケンカばかり
後 1：話していない

Ⅶ. 自己理解

前 4：自分の感情に興味ない感じ
後 7：自分の内側に気を使えている感じ

アセスメントと個別支援計画

目的

若者を支援するにあたり、「自己決定」は重要な要素です。また、「自己決定」は「人間の尊厳」であり、私たち支援者は若者の「自己決定」を支援することにより、「自立」を支援していると言ってもいいでしょう。自立支援を適切に行うためにアセスメントからプランニング、モニタリングという体系化された支援手法のもとで、支援の必要性や方策を具体化していき、本人のみならず、関係者等と協力して支援が行われることを目的としています。

アセスメント（把握・分析）

質の高い個別支援計画を作成するために必要なのは、「アセスメント」です。利用者の情報を収集、分析するだけでなく、利用者の価値観、考え方、生活習慣だけでなく、家族、関係者など生まれてから現在に至るまでの環境などを含めた人間像全体を把握することが重要です。適切な情報収集を行うためにも「傾聴」や「質問」の技法を学ぶことも大切です。

↓

プランニング（支援計画）

アセスメントに基づいて、利用者のニーズや問題解決に向けて利用者と協力し合いながら立案をします。利用者の「自己決定」を基本としながらも、短期・長期の目標設定や目標達成のための利用者本人の行動とその支援策（誰が、どんな時、どのように、どれくらい）などを具体的にするとともに、利用者本人の「合意」のもとプランを立てましょう。

↓

モニタリング（評価・検討）

モニタリングは利用者の目標に対する達成度合いを確認するだけでなく、提供されている支援の良し悪しや課題を把握します。把握した内容をもとに目標達成時期の再設定や支援内容の変更、新たな目標の設定を利用者と相談しながら進めるとともに、今後のモニタリングの頻度や目標達成後のアフターケアや支援の終了とその見極めについても話し合いましょう。

アセスメントシート

フェイスシート（基本情報）

フリガナ	ヤマナシ ハナコ	年齢	15歳	生年月日	ーーー
氏名	沖縄　花子	性別	女性	所属	M中学校

住所	〒901-○○○○ 沖縄県M市○○○○○○○○	連絡先	090-○○○○-○○○○
		緊急連絡先	090-○○○○-○○○○（母）
		LINE・Mail	

その他

・関係機関（関わっている機関や人）
○○中学校　担任：担任先生　進路担当：中路先生　SSW：田路さん
青少年センター職員　八重山さん

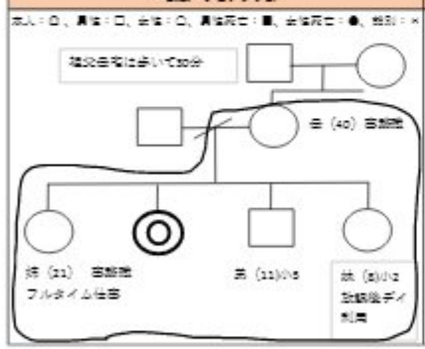
・病歴（病院名・病気・治療など）
○○○○○○クリニック
精神科定期　1/2通院ー1回/1ヶ月
内服　　抗剤○○○○
　　睡眠○○○○
・アレルギーや持病など
甲殻類アレルギー

・キッカケ（どうやってここに繋がっているのか？）

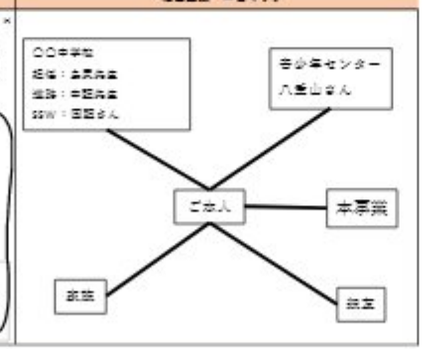
スクールソーシャルワーカーの田路さんからの紹介

・家族　ジェノグラム

本人：○、男性：□、女性：○、男性死亡：■、女性死亡：●、性別：×



・社会資源　エコマップ



・学歴や職歴（入退社・アルバイト）など

令和XX年	4月	M小学校	卒業
令和XX年	X月	1年生	M中学校　在学中
年	月	退職	
年	月	退職	
年	月	退職	

・生活歴（一人暮らし・離婚）、病歴（入退院）など

令和XX年	12月	1年生	母が入院
年	月	退院	
年	月	退院	
年	月	退院	
年	月	退院	

・資格取得など

漢字検定4級　取得

・あなたについて教えてください。

趣味	音楽を聞く、動画・SNS鑑賞。
性格	友人と遊びに行くことも好きであるが、1人で過ごすことも好き。相手を伺う、シャイ、人見知り。
得意	絵を描くこと、料理すること、好きなことには集中する。
苦手	長時間家族以外に人と一緒に過ごすこと、思い込みが強くコミュニケーションが苦手、友人からは口が悪いと言われる。

・あなたのこれまでを教えてください。

（学校のこと）
小学校まではほとんど学校へ通学し成績もよかった。小6ぐらいから、同級生とそりが合わず距離を置くようになる。学校の準備はするが徐々に起きれなくなった。中学に進学してまた頑張ろうと思ったが、同級の離婚が原因で家事負担が増え、家事をするのが嫌で夜に出歩くようになった。中学2年の後半にその時の組任と喧嘩をして以来、完全に不登校となり、学校に行かない日は友人と一緒に遊び歩いている。中学校に呼ばれて通学する日は、スクールソーシャルワーカーとの面談するか保健室でゆっくりしているかのどちらかである。同級生との交流は苦手である。
（将来のこと）
親や姉に高校に行っていたほうがいいと言われている。進学を検討しているがその理由は友人が進学すると言っていたからであり、学校へ通うことのメリットがいまいちわからない。進学したとしてもバス代などを考えると厳しいと考えている。アルバイトぐらいはしたいなと思っている。
（家族関係）
母親は仕事でほとんど家におらず、夜帰宅したらお酒を飲んで寝が続くなる。相談したい時があっても話が喧嘩になり相談ができない。相談すると、下の兄弟の面倒みろと言ってしつこい。母親も組必母も忙しいと思うが、話をしたいことや相談したい時に喧嘩になってしまうので、なんで自分だけこんな境遇なんだと思ってしまい逃げ出したくなる。

・本事業で興味のあるプログラムやチャレンジしたいことを教えてください。

同世代と交流できるようになりたい。進学でも就労でもいいので、中学卒業後の進路を決めたい。
プログラムでは課外活動に興味がある。

・「今後どうなりたいか？」教えてください。（現時点の目標や将来像・なりたい自分など）

｜3ヶ月後（Job Camp終了後）のあなた｜
友人ができて、自分のやりたいことや興味があることをわかっているといいなと思う。
｜1年後のあなた｜
高校へ進学するか、就職している。進学しながらアルバイトしている状態が理想。
バイトで得たお金で友人と遊びに出かけていたい。

・家族や関係機関の想いを教えてください。

｜家族や保護者の想い｜
　母：離婚して以降、中々本人と会話ができずできたとしても言い争いになってしまうので就職できたらと考えている。姉もサポートしてくれると言っていることからできれば高校へ進学してほしい。
｜関係機関の想い｜
学校の中では浮いた存在となってしまっており、学級への復帰は難しい。（本人が教室に入るのを嫌がる）スクールソーシャルワーカーとの面談では現状を打破したいと話しており、他に居場所を見つけ中学校卒業後の進路について考える機会が必要だと考えている。元々性格は真面目であるので、対人交流に関しては問題ないと考えている。

※例としての記載です。情報や内容については仮定して記載しています。

みらいデザイン＊プランシート（アセスメント）

なまえ：沖縄　花子

［見届け人］　支援員A
［作 成 日］　20XX年　XX月 YY日　プログラム参加時

私が望む生活

生活基盤（収入など）	ライフスタイル（ＱＯＬ）	住環境・生活環境	コミュニケーション
・定時制か通信制高校へ進学していたい。 ・学校に通いながらアルバイトをして月5万程度のお小遣いがほしい。	・平日は学校へいって、休日は1人の時間をもてる環境がほしい。 ・月に数回は、同世代と遊びにいっている状態。	学業を優先するため実家で暮らすが、できれば1人部屋がほしい。教科書を保管したり勉強できるスペースがほしい。	・相手の意見を聞き尊重できる人になりたい。 ・自分の考えていることを上手く伝えられるようになりたい。

将来像

長期	1年後の目標	・1年後はどうなっていたら幸せ？？ 通信制高校を一人で卒業するのは難しいと思うので、日常的なスクーリングがある全日制か定時制高校に進学し、アルバイトをしていたい。休日は友人と遊んでいたい。
中期	3ヶ月後の目標	・プログラムが終わったらどうなっていたい？ 休日に遊べる友人ができていると嬉しい。進学すると決まっていたら、入学に向けた準備をしていたい。

できるようになるために？

生活基盤（収入など）	ライフスタイル（ＱＯＬ）	住環境・生活環境	コミュニケーション
・高校の情報を集める。 ・入学準備を行う。 ・入学後アルバイトを見つける。	・同世代との交流を増やす。 ・集団活動に参加し、経験を増やす。	・入学前に関係者会議を行う。 ・母親に希望を伝える。	・プログラムに参加をしながら、対人コミュニケーションを学ぶ。 ・対人関係で困った時は、相談ができるようにする。

プラニング・モニタリングシート

用途	状態像に対して個人の取り組みやサポートを具体的に可視化していきます。以降、本プランを元にモニタリングを行い、達成度合いの見極めや内容の変更、修正を行います。

みらいデザイン＊プランシート（プランニング/モニタリング）

なまえ：沖縄　花子

［見届け人］　支援員A

［作 成 日］　20XX年　XX月 YY日　プログラム参加時

No	こうなりたい！	できるようになるために？	どんなことにチャレンジしてみる？	スタッフサポート
1	居場所が欲しい。	昼夜逆転を直す。	①週3～5回プログラムに参加する。（最初の1ヶ月間は参加したいプログラムを選択し無理のない範囲で参加する）	①体調が悪くなったら、休憩する時間を設けます。寝坊などで遅刻した日は、個別で送迎を行い参加ができるようにします。
2	1～2人親しく話せる人がほしい。	・同世代と関わり、話せるようになる。	①同じ趣味や興味をもっているメンバーを探して声をかけてみる。	②他のメンバーと交流ができるよう小集団を形成し、間にスタッフが介入し、交流しやすい状況をつくります。 また声をかける方法がわからない時は、希望に応じて、個別で声かけの仕方を教えていきます。
3	中学校卒業後に アルバイトをしたい。	職場体験のプログラムに参加する	①飲食店の職場体験には必ず参加する。他の職種で興味のある体験には参加して、選択肢を広げる。	③職業人講話や体験を通して、興味関心や適正、能力などのフィードバックを行います。履歴書作成や面接の模擬練習を実施します。
4	進路を決めたい。	自宅から通える高校を探し、入学準備を行う。	①志望校の情報収集を行う。 ②オープンキャンパスへ参加する。 ③入学願書を作成する。 ④中学校へ内申票を依頼する。	④進学準備の時期がきたら、スタッフから声をかけます。できるだけプログラムに参加して、情報取集をしていきましょう。必要に応じて進路面談を実施します。

私が取り組むこと（まとめ）	各項の①、②、③、④にチャレンジしてみる。 困ったらスタッフ相談する。	その他	10月～11月頃には進路決定する。	その他留意事項	10月～11月に学校関係者と会議を行い、進学に必要な準備を確認します。

支援手法検討会、各支援機関からのメッセージ

本事業は有識者や実践者で構成する支援手法検討会を設置し、効果検証や手法作成を試行錯誤しながら進めました。また、同じ対象者を支援する関係者らとともに各居場所や支援現場における汎用性の実証にも取り組みました。3年間ともに励んできた支援手法検討会や支援関係者からのメッセージです。

長年にわたって、スクールカウンセラーとしての活動等を通して子ども達の支援に関わってきました。その日々の中で、中学校を卒業する時に進路が決まっていなかったり、高校を中途退学となる若者たちについて、ずっと気になっていました。そのような若者たちが、自分自身の将来を見つめなおすきっかけを、それぞれの地域の居場所で得ることができるようになるための多くのヒントがこの冊子には含まれています。

ジョブキャンプに関わらせてもらって、この時期の若者たちについて大切なことが2つあると思います。一つは、今のそのままの状態に寄り添ってもらいたいという思いに応えること。もう一つは、仲間との程よい交わりへの思いに応えること。安心感と仲間との成長を大切にする、と言えるかもしれません。安心感につながるためのアセスメントや支援計画、仲間との成長のきっかけとしての基本プログラムや就学・就労体験。それらがうまくかみあった時に若者たちがどう変化するのか、この冊子に記されている事例を通して伝わってくると思います。変化のきっかけを待つ多くの若者に、このヒントを活かした活動が届くことを心から願います。

琉球大学
本村 教授

本事業は、子ども達や関わる大人達の多様性に応じて、プログラムに広がりが図れるよう工夫されている他、一つ一つの要素を汲み取っても、様々な分野への汎用性が非常に高い内容となっています。また、個別的視点から課題把握や関係性の構築を段階的に深め、実体験を通じて集団性と社会性を広げ、その過程で自己理解を高めながら選択的進路へと伴走し、支援という名の補助輪を外していく。これらプログラム全体の流れを体系的に捉えても、日々の支援に役立つことが多いと感じています。

支援者において一番のまなびは、目の前の子ども達と向き合う中で受け取るものだと思っています。一人一人異なる日々の関わりから得たまなびが、新たな支援の啓発へと繋がり、次の誰かにとっての「道しるべ」となります。まさに、綴られた想いはオシャレに着飾ってみせても非常に泥臭い支援の結晶であり、描ききれなかった想いやストーリーも含めて、ここに関わった子ども達と本事業を実施した事業者の皆さんからの「道しるべ」だと感じています。そんな皆さんへの感謝と共に、手に取る皆さんの想いと新たな支援が出会うことを願っています。

元拠点型居場所統括
兼 圏域コーディネーター
蟇目 氏

「ひ・き・こ・も・り」というだけで人格や能力まで自己評価していないか。そこに至った「経過」やそうなった「わけ」にもっと目を向けるべきではないか。置かれている「環境」を変えることで別の世界が拡がるのではないか。ジョブキャンプという出会いと体験の場を通して、支援の手法に工夫を凝らすことで、これらの沸々とした疑問を一つずつ解消してきた3年間でありました。最も着目すべきは、次の3点に集約されます。

1.どこから、どのような目的で繋がれてくるのか。

支援機関との関係づくりがとても大切でした。本人がどこに戻るのかも意識することが求められ、支援者間の継続的な関係が重要だということです。

2.どのようなプログラムが効果的なのか。

いくつかのstageに分かれた中で、それが本人に順序立てて作用するのではなく、何がヒットするかを見極める目が必要でした。それにより短期間でも効果が実証されました。

3.プログラムの評価をどのように行うのか。

所属感、役割、自己効力感の3つの獲得を意図してきました。ふり返りを常とする自己評価を基本としてきたことで、納得のいく評価法を模索してきました。

今回は、スタッフの懸命かつ創造的な動きがあり、信頼できる手法として確立できたと考えています。今後は、全県でこれが取り組める環境づくりが課題となります。

沖縄大学
島村 教授

関係者のコメント

支援者と利用者が対等な関係で進めていることが勉強になりました。評価しないことや本人の考える力を信じる事など私自身が自分と向き合う時間でもあったように思います。つい促しすぎたり、しそうになったりしますが根底に支援根拠を落とし込んでいることが分かりました。

こどもの居場所 支援員

行政 こども支援員

対象者と同じ空間で参加することができ、対象者の目線を肌で感じることが出来た。早いうちに自己理解、他者理解を身に付けることで自分自身をケアすることが出来るように思う。本市は中卒進路未決定者や高校中退者の受け入れ資源が不足しているので、ぜひ取り入れて活用していけたらと思った。

全体的に自由な雰囲気が流れていたが、全員が参加意識を持っていることがすごいと思いました。また、お互いの意見や考え方を尊重する支持的風土ができ上がっており、スタッフの方々の丁寧なサポートや声かけによるものだと感じた場面がいくつも見られ、それらの手法や考え方は、非常に勉強になりました。

スクールソーシャルワーカー